



高い天井、仕切り壁を取り去った空間の開放感は格別。右奥は社長室。



住宅用の平家プランを事務所仕様様にリモデル。前に張り出した折れ屋根のため、雨の日もゆったりデッキが使える。



作業員用玄関。元の風呂のスペースを活用。



土木は木が出るので薪には事欠かない。



玄関の壁は全面がすりガラス。

Type 2

北海道・標津



(株)道東土建

北海道・標津町で基礎、外構、道路などの土木工事を手掛ける。このほど、事務所にログハウスを建築。

北の大地にセルフビルド 新事務所に人の輪が育つ

北の大地・標津町
街道沿いにログハウス

標津町は、北海道の東のはずれ。東の間の夏に、その大地を車で走ると、雄大さに圧倒されつつ、冬の寒さはいかばかりかと、どこかで想像してしまおう。だから、街道沿いに、この一棟のログハウスの素朴な佇まいを見た時、微笑ましく思うと同時に、冬の厳しい自然に立ち向かう姿を想像し、つい、健気に思えてしまった。

建てたのは土木の職人の手
土建屋の事務所として

「事務所として建てたんですよ」
オーナーは、この地で土建業を営む、徳永幸男さん。その会社、(株)道東土建の新しい拠点として建築したのがこの家だ。

普段は土木工事、基礎ならお手のもの。みんなであればログ組もきつとできる。計画は、そんなことから始まった。楽しかった共同作業はチーム力を高め、完成した事務所では、木の温もりに、人の輪が育っているようだ。



デッキは、標準サイズの奥行き 1.5m。



白に薄いグリーンが爽やか。

「前の事務所が築55年と古くなってしまったため新しくしようと思ったんです」
それが、この度の建て替えの発端だった。

その際、一つの考えが頭に浮かんだ。
自分たちで建てたらどうだろうか？

冬場、厳寒に閉ざされるこの地では、春まで仕事が少ない。その間に、日頃は、土木の現場に立つ職人の手で、新事務所の建設ができないだろうか？ 基礎ならできる、外構もできる、となると、あとは建物だ。

「ログハウスなら、自分たちで組み立てられるかな？」と想ったんです」
総勢8人の男手がある。みんなでチャレンジして、やれないことはないだろう。

早速、ネットで情報収集。1件のメーカーが目にとまる。デザインがいい。すっきりして、なおかつ、頼もしい。そして、セルフビルドの応援もしてくれる。

「問い合わせをしたら、対応が早かったです。まだ建てるかわからないのに、社長がすぐに来てくれましたから(笑)」
しかもそれは、本社のある、なんと広島から。それが、サエラホームだった。

「この場所を見て『いい感じで建ちますよ。応援します』と言ってくれました」
よしやろう！決まるのも早かった。

コロナ禍に遠距離でレクチャー
懇切丁寧だったメーカーの指導

着工は、この4月のこと。
基礎は、お手のもの。

▶ロフトからオフィスを見下ろす。
▼カウンター風に設えたデスク。



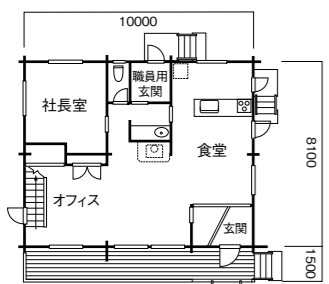
ロフトは書類の保管と社員の休憩スペース。

広々空間でログ材が存在感を示す。

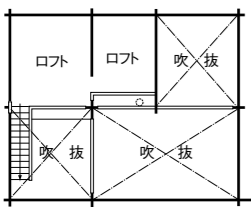
オーナーさんからの一言

これからは、日曜日に子どもを連れてきて、楽しむような場所にしたいです。気楽に、誰でも、堅苦しくなく使えるといいですね。

（株）道東土建 間取り図



■ 1階：81.00㎡
■ デッキ：15.00㎡



■ ロフト：24.24㎡

■ 取材協力：（株）サエラホーム TEL.082-256-4550

「真新しい木の家にお邪魔してみよう。」「事務所だけど、事務所じゃない、そんな建物にしかたありません。日曜日には、みんなが子どもを連れて遊びにくるような」この基本コンセプトを形にするために、ベースとしたのは「R X S 72 V」。平家住宅のプランを事務所むけにカスタマイズした。玄関を入ると、そこは広い空間。仕切り壁を取り払い、元のプランのリビング、洋室をひと続きにした。そして、見上げれば大きな吹き抜け、天井は高い。食堂を含め建物の端から端が見渡せる開放感は格別だ。大まかに、手前が応接、奥がワークスペース。デスクは壁に設えたカウンター風とした。元のプランにはなかったが、ここでは、2階にロフトを設けた。書類の保管スペースにするためだ。そして、もう一つ。

「居心地がいいですね。仕事じゃなくても、ついここに来て、コーヒーを飲みながら、本を読んだりしています」セルフビルドでみんなの絆が深まり、木の温もりが包まれ、人の輪が広がる。ログハウスだからこそのことだ。

社員がくつろぎ、地域の仲間が集うコミュニティの場でもある

まれ、やってよかったなと思います」

「仕事に疲れたら、ちょっと寝をべって昼寝をするのいいなと思っています」建物全体は、幅を広げて、ひと回り広くしている。そのせいもありキッチン、食堂は、かなりしっかりと採ってある。ここは、まずは、もちろん、社員一同でゆったりと使った。そして、その他にも構想がある。



広々とした社員食堂。地域おこしの仲間とも集う他、将来的には子ども調理教室などもやりたいそう。



社長室。明るく快適な空間で、仕事もはかどりそうだ。



事務所奥から玄関、食堂方向を見る。

「ログを組み始めたのが連休明けの5月。初めての作業だったので、積むのがさぞ大変かと思いきや、そうでもなかった。」「サエラさんの部材の精度が高くて、キックも、緩くもなくピッタリはまるんです」長い材も、大人二人で難なく運べた。高所は、足場を組んで作業したが、上の部材ほど小さくなるので上げるのは苦ではない。ただ、自分たちの意外な弱点は、…。「普段、穴にもぐっているんで、高いところが苦手というのが判明しました(笑)」大変だったのは、屋根だ。「垂木や金具など、どれがどこにはまるのかよくわからないんです。サエラさんに何度も電話して教えてもらいました」生憎のコロナ禍。さすがのサエラホームも北海道まで来ることができなくなった。そのため電話、メール、写メで、根気よくやりとりをして説明を受けることとなった。しかし。「いつ電話をかけても、嫌な顔一つしないんです。丁寧に教えてもらえました」新築のログ壁が数年かけて沈む際に、窓枠などの建具が壊れないように施すセトリング処理も同じように遠距離指導だ。「スライド金具の付け方や、留めていい所ダメな所、全部、聞きながらでした」未知のウィルスのため、思いもよらない「テレワーク」作業となったが、それも乗り越え、竣工はこの7月のこと。「最初は戸惑っていた社員のみんなも、最後は楽しんでやってくれました。一体感が生まれ、その集まりにも使いたいです」標準は鮭の町。この名産を使い鮭節、鮭のつゆ、鮭の漬けを開発・販売しており、その拠点の一つにもしたいというわけだ。新事務所は、ただのワークプレイスではない。社員がくつろぎ、地域の仲間が集う、みんなのコミュニティの場でもあるのだ。その使い心地はいかが？「居心地がいいですね。仕事じゃなくても、ついここに来て、コーヒーを飲みながら、本を読んだりしています」セルフビルドでみんなの絆が深まり、木の温もりが包まれ、人の輪が広がる。ログハウスだからこそのことだ。